

成長しつづける町 女川

～若者とよそ者を活かす復興～

江場龍之介，佐渡温輝，角田紗季，山口美奈
指導教員 中村亨

中央大学 商学部 中村亨ゼミ

要約

私たちは、被災地宮城県女川町の復興について調べるゼミ活動を行っている。女川は、地震や津波により、甚大な被害がでた。だが、若きリーダーたちやよそ者などの協力により、圧倒的なスピードで復興が進んでいる。女川は、内と外の交わりを大切にし、住み来たる町になるための取り組みも多く行っている。事前調査に加えて、現地で体感した女川の魅力を伝え、多くの人に女川訪問を勧めたい。

キーワード：女川・復興・町おこし・若者

はじめに

私たちは、被災地宮城県女川町の復興について調べるゼミ活動を行っている。女川町を調べている中で、若者を中心に、町外の人と女川町の人が力を合わせて復興を行っていることが分かった。復興の進んできた女川町は、積極的に観光客や移住者を受け入れている。私たちは、人々を引きつける女川町の魅力を伝えたい。

取り組み

女川町は津波による被害は宮城県内でもっともひどく、人口の約9%が死亡または行方不明となり7割もの住宅が全半壊した。しかし、震災からわずか20日間弱で支援物資として寄付されたコンテナを活用したコンテナ村商店街をオープン、そして9月には、住宅を高台に移す、防波堤を作らず盛り土するといった復興計画を発表した。他の被災地では、2013年時点でも復興計画に合意ができず、工事が開始できないといった状況を見てみると、圧倒的な復興スピードである。その裏側には、30代から40代の若きリーダーたちの存在、よそ者の活用など他の町はない様々な要因があった。

女川をつなげた男青山貴博

復興スピードを早めた最大の理由は、民間の復興連絡協議会(FRK)の存在があったからである。被災地において民間の復興連絡協議会は女川が最初だという。FRKは民間復興の核として、JR駅舎と中心街市街地の設計構想や水路の確保、商工会の統括など様々な活動をおこない地域復興に貢献した。このFRK設立のキーマンとなったのが青山さんである。

青山さんはFRKを設立するため、通信手段もないなかで生きている人を探し歩いたという。女川連絡復興協議会(FRK)の推進事務局、グループ補助金の窓口、仮設住宅の開設など、これらの全てに青山さんが関わっている。

青山さんは、住民に残ってもらう「住み残る」、避難している住民に戻ってきてもらう「住み戻る」、観光客に来てもらう「住み来たる」、この3つを柱にコンパクトシティを目指したコンパクトシティとは、人口減少や高齢化が進んでいる地方都市に多く見られるもので、生活に必要な機能を一定の範囲に集めて効率的な生活・行政をつくるものである。

そして、計画から2年後に完成したのが「シーパルビア女川」である。水産業を体験することができる「あがいんステーション」、女川ならではの新鮮な海の幸を堪能することができる観光物産施設「ハマテラス」、町内外の人を集め、町の課題や未来について議論する地元交流施設「Camass」、この他にもカフェやお土産屋など様々な施

設が集まっている。現在は青山さんはJR駅舎の「中心市街地商業エリア復興連絡協議会」の主要メンバーとして活動している。

持続可能なまちづくりを目指して

女川の復興に尽力している人物がいる。女川唯一の新聞屋、梅丸新聞店の代表である阿部喜英さんである。

阿部さんは震災前から女川の人口減少問題を深刻にとらえ、女川の活性化に携わってきた。具体的には、商工会青年部に所属し、女川の魅力を発信するためのコマーシャルの作成や、ご当地ヒーローである「リアスの戦士 イーガー」の誕生に携わった。そんな中、東日本大震災が発生した。

震災直後は連絡手段がなく、人々が口伝えで情報を伝えるような状況が続いていたが、女川の商工会では大きな動きがあった。震災からおよそ1か月後の4月12日、商工会を束ねていた高橋正典会長が水産業や商工業などの地元関係者を集め、これからの中長期的な復興は若い人たちに任せると宣言したのである。そこで阿部さんを含む商工会の若手が主体となって、2011年5月4日に開催したのが「復幸市」というあおぞら市である。このプロジェクトの主導権は完全に若者にあり、ベテランはサポートにまわった。若者が思い切り自分たちの力を発揮できるような状況が作られたことで、女川に新しい風が吹き始めたのである。

このような活動を通して震災前よりも本格的に女川の地方創生に取り組むようになった阿部さんは現在、本業である新聞屋の代表のほかに、復幸まちづくり女川合同会社の代表、教育委員も務め、女川を持続可能なまちにするためにマルチに活躍している。

内と外が交わり、学び合う場所

被災地である女川に、地元の人と外部の人人が交わる場所がある。それは、NPO法人カタリバが運営する女川向学館である。

女川向学館は、「被災した子供たちが安心して学べる場をつくることで、これからの東北復興を

担うリーダーを育てたい」という思いから2011年7月に宮城県女川町に設立された、放課後学校だ。設立当時に教壇に立ったのは、県外出身のカタリバの職員や被災して仕事場を無くした地元の塾講師などである。現在は教務ボランティアの募集やインターの受け入れを行っており、各地から様々なバックグラウンドを持つ人が集まってスタッフとして働いている。

つまり、この学校は、女川町が県外の人の力を積極的に取り入れたために実現できたのだ。

向学館は被災地の子供たちと県内外出身の大人が関わることで、互いに学び合える場所なのである。

「住み来たる」町になるために

女川では現在、女川について知りたいという人を対象とした“お試し移住プログラム”という活動を行っている。これは5日間から31日間実際に女川に住み、町の住民や雰囲気に触れながら、女川のライフスタイルを体感できる、というものである。滞在期間中の活動は個人で自由に決めることができ、シーパルピア女川にあるお店でアルバイトができたり、女川で開催されるイベントの手伝いができたりと、よそ者を積極的に取り入れる女川町の懐の深さがうかがわれる。また女川コワーキングスペース Camass の滞在期間中無料利用券がもらえるので、ここで仕事をしたり、ここにインターンシップをしに来たりする大学生も多いそうだ。

この女川移住プログラムに参加するにあたっては、“お試し移住者リレーブログ”で実際に移住してみての感想などを書くことが条件とされており、このリレーブログが女川の新しいガイドとなることを目的としている。自分たちの町の良さを外部の人間に伝えてもらうという点で、震災発生直後から変わらない女川町のよそ者活用のうまさを感じることができる。

おわりに

私たちはゼミ合宿として女川へ行き、女川町の復興やさらなる成長に向けての強い意志や外部の人も含めた団結力、それぞれの人の思いを実感することができた。連休や長期休みを利用して、成長し続ける町、女川を体験してみるのもよいのではないだろうか。